趣味とサークル

長唄「四季の敦賀」を保存・継承

敦賀の歴史を題材とし、四季の唄で表現

長唄「四季の敦賀」保存会
演奏の部代表
杵屋勝浩矢さん

長唄「四季の敦賀」保存会
顧問
杵屋浩波美さん

敦賀の文化を象徴する芸能として、保存・継承されているのが、長唄「四季の敦賀」です。昭和7年（1932）、敦賀の実業家で文化人でもあった宇野泰三氏が作詞を土岐善麿氏、作曲を町田嘉章氏に依頼して制作。「敦賀の港は海ふかく…」から始まる唄は、春は花換まつり、夏は松原海岸、秋は敦賀まつりと山車、冬は野坂山と水戸烈士を題材に、国際港として栄えた敦賀の歴史的背景を四季ごとに表現しています。夏の唄は、敦賀まつりの「民謡踊りのゆうべ」でも披露されており、聞き覚えがある人も多いのではないでしょうか。

「四季の敦賀は曲が良く、歌詞もきれい。楽曲の素晴らしさを若い人たちにつなげていきたい」と話すのは、長唄「四季の敦賀」保存会で演奏の部 代表を務める杵屋勝浩矢（きねや かつひろや）さん。3歳から日本舞踊をたしなみ、西崎流師範として活動する傍ら、長唄三味線 杵屋勝七郎に師事し杵勝会にも所属。同じく杵勝会所属で勝七郎門下の杵屋浩波美（ひろなみ）さんとともに、長唄の指導・普及に取り組んでいます。

長唄は歌舞伎の音楽として成立し、主に江戸で発展してきた三味線音楽。その後、歌舞伎から独立し、音楽として独自のジャンルを確立しました。

何度も途絶えかけながら保存活動を継続

長唄「四季の敦賀」が、制作されたのは昭和7年。翌年には披露演奏会が行われ、NHKのラジオでも全国放送されました。

笛・大鼓・小鼓・太鼓といった鳴り物の演奏も長唄を盛り上げます。

「当時は敦賀に芸者さんがいた頃で、おもてなしの席でも披露されていたようです」と勝浩矢さん。その後、戦争などで継承者が途絶えてしまいましたが、昭和30年（1955）代後半に保存・継承の動きが起こり、元敦賀芸妓を呼び寄せて譜面を作成。唄や鳴り物だけでなく踊りを主体として上演や祭りへの奉納がされるようになりました。昭和61年（1986）には、長唄「四季の敦賀」が保存会を結成。敦賀市制50周年の祝賀会で披露するなど、盛り上がりを見せたものの、勢いを継続するのは難しく、いつしか活動も停滞していきました。

再び保存の動きが活発化したのは、平成30年（2018）。翌年、敦賀市文化協会が60周年を迎えるのを契機に、敦賀市の伝統文化を保存・継承していかなければならないという気運が高まり、保存会を再結成。勝浩矢さんや浩波美さんらが中心となり、保存活動を再スタートしました。新生保存会での初お披露目は、敦賀市文化協会の60周年記念祝賀会。その後も市民文化祭や文化芸術の広場など、様々な行事で上演を重ねています。

興味を持った人や子どもたちに伝えていきたい

現在、長唄「四季の敦賀」保存会のメンバーは、演奏の部が12名、踊りの部が12名。毎月第3土曜日に西公民館に集まって活動しています。

「いろいろな場で披露して多くの方に知っていただき、興味をもってくれる人がいたら、伝承していきたいですね。機会があれば子どもたちにも教えていきたいです」と、勝浩矢さん、浩波美さんは活動への思いを膨らませています。

昭和に誕生した敦賀の芸能文化。時を超えて令和の今に受け継がれています。

令和3年（2021）に開催された市民文化祭 芸能の祭典でのステージの様子。

●この記事に関するお問い合わせ
杵屋勝浩矢さん
0770-24-2202

発行所■日本原子力研究開発機構 敦賀事業本部＝〒914-8585 敦賀市木崎65号20番地
☎0770（23）3021 ホームページ https://www.jaea.go.jp/04/turuga/（2023年3月発行）